（様式２）報告書

令和５年度　特色ある教育実践研究校（道徳教育）報告書　石内北小学校

１　学校の課題

本校においては、「チーム学校」としての組織力及び教職員の教師力・授業力について育成していくことが課題となっている。

⑴　児童について

○　６月に実施した児童意識実態調査において、「授業中、先生や友達の話をしっかり聞いている」「授業中に進んで考えたり伝えたりしている」の項目では、９割以上の児童が肯定的な回答をしており、授業を真面目に取り組んでいると意識している児童が多いことが分かる。

○　実際の児童の姿を見ると、話をよく聞いているようで学習内容が理解できないまま時間が過ぎたり、授業中の発言は、一部の児童に限られたりしている授業が多く、自分の考えをもつことや表現すること、他者と共に学ぶことについて、自己評価と実態がかけ離れている。

⑵　学校体制について

○　今後、児童が 1000 人を超える大規模校となり、児童数・職員数が急激に増えることが予想される。

○　開校から６年間のうち３年間はコロナ禍であったこともあり、学校組織力が低く、学校文化や特色等が確立されていない。

２　研究主題

自己の生き方に向き合い、共によりよく生きる児童を育む道徳教育
～ねらいを明確にした授業づくりと聴き合い伝え合う児童の育成～

３　取組内容

⑴　組織的な研究体制づくり

各校務分掌部において、授業力・学級経営力を高めることを柱に、それぞれテーマを掲げ、推進を図った。

部	テーマ
教務	伝えよう・反応しよう
研究推進	対話し学び合おう
児童支援	一人一人のよさを支える児童理解
保体	心も体も育てる遊びの充実
生活	豊かな関わり合い

▲平和集会の様子

これらのテーマのもと、学校教育目標と研究で目指す姿を一つに絞り、組織的に研究を推進する共通認識を図った。例えば、生活部「豊かな関わり合い」では、縦割り班活動において、異年齢の児童が集まり、人と協力することができる子どもを育てることを目標に取り組んだ。７月に行われた「平和集会」では、「石内北小学校をどんな学校にしたいか」と１～６年生で話し合った。また、

教務部「伝えよう・反応しよう」の取組との相乗効果で、一人一人の意見を、うなずきながら、共感的に最後まで聞き、縦割り班で異なる意見を一つにまとめていった。１２月のオリエンテーリングや休憩時間の縦割り班遊び、６年生を送る会など、学校教育目標・研究で目指す子ども像にむけた共通理解のもと、それぞれ部が推進する体制とした。

⑵　聴き合い伝え合う（対話する）児童の育成

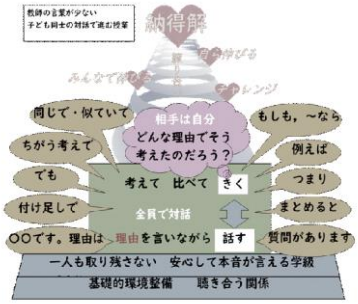
①　学級づくりに関する重点目標の設定

２か月ごとに学級づくりに関する重点目標を定め、各学級で指導を行った。設定した重点目標は次の通りである。

月	重点目標
５月	６０％の考えのリレー 児童が考えを言いやすくなるよう、「完璧に話せなくてもよい。途中の考えでも伝え合うことで仲間とつながりあって学習が深まる。」ことを全学級で指導するようにした。
６月　・　７月	ペア・グループトークの徹底 自分の考えを言うことができない児童が多くいる状況を踏まえ、「ペア・グループトーク」の徹底を目標とした。具体的な指導方法を校内研修で話し合い、まずは小規模で対話のよさや楽しさを児童が実感できるようにした。
９月・１０月	反応しよう 授業研修会において、反応し合うことが児童の対話を豊かにすることが分かり、「どうですか。」「いいです。」の画一的な反応よりも友達の発言に一人一人が頷いたり、「うんうん。」「あー。」「なるほど。」「そんな考えもあるんだ。」などとあいづちをしたりすることを、教務部提示の「あいづち」「ジェスチャー」の掲示物を活用して全学級で指導するようにした。
１１月・１２月	基礎的環境整備 「基礎的環境整備」に関する研修を児童支援部と連携して行い、その意義や指導方法について教職員全員で共有した。
１月　・　２月	聴き合う関係をつくる 「聴き合う関係をつくる」に関する研修を教務部と連携して行い、その意義や指導方法について教職員全員で共有した。また、校内授業研修会において、「基礎的環境整備」「聴き合う関係をつくる」ことを特に意識して授業研究に取り組み、そのよさや児童の変化を教職員が実感できるようにした。

② 目指す授業像の設定

１０月に教員を対象に実施した意識実態調査の結果を基に、本校が目指す授業像を「教師の言葉が少なく、子ども同士の対話で進む授業」と定め、全教員で共有することで、対話が成立する学級づくりの土台と具体的な対話のイメージを教職員で共通認識できるようにした。

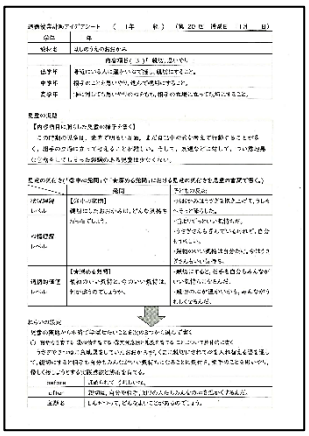


▲本校が目指す対話のイメージ

(3) ねらいを明確にした道徳科の授業づくり

① 「道徳科授業計画アイデアシート」の活用

教師がねらいを明確にもち、目指す児童の姿をイメージした上で授業に臨むことができるよう、「道徳科授業計画アイデアシート」を開発した（添付資料１）。このシートを活用して、本時のねらいや発問、ねらいに迫る子どもの姿（言葉）を具体的に整理することで、どんな授業展開になっても、子どもの思考を大切にしながら授業を進めることができるようにした。また、このシートを使い、ねらいに迫る子どもの姿などを学年間で共有した。



▲道徳科授業計画アイデアシート

② 道徳教育推進教師を中心とした授業づくり

全学級において、道徳教育推進教師との TT 授業を実施した。また、道徳推進教師を中心に教材研究と振り返りを行い、授業を実施する上での悩みを抱えた教師の相談役になったり、情報提供をしたりして援助することができるようにした。また、道徳教育推進教師が道徳科に関する授業研修を年６回企画し、悩みや解決策について全教員で共有することができるようにした。

▲道徳教育推進教師による研修

4 検証結果

(1) 聴き合い伝え合う（対話する）児童の育成

○ 意識実態調査の結果

【児童】

「友達の考えを聞き、うなずいたり言葉を返したりして、話し合いに参加することができましたか。」

９月：９２％　　１月：９２％

「ペアやグループ、学級全体で自分の考えを発表することができましたか。」

９月：８８％　　１月：８８％

【教員】

「安心して発言できるよう聞く姿勢を育てることができたか。」

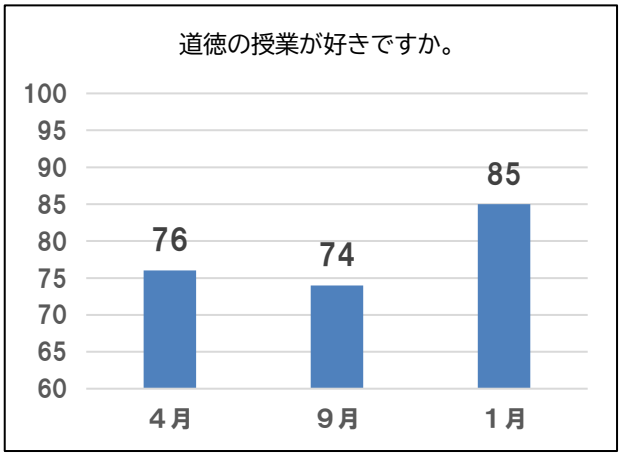
９月：９２％　　１月：９２％

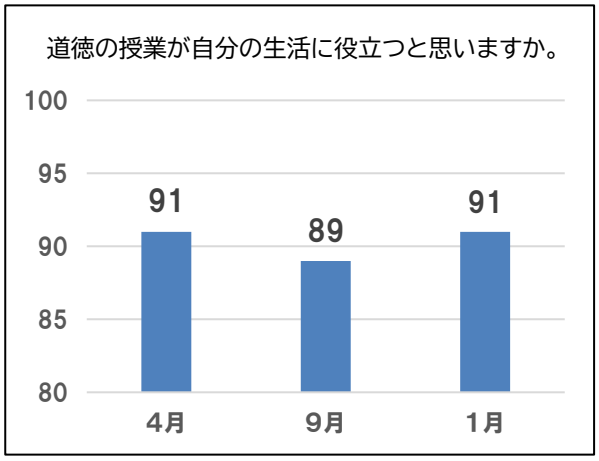
「対話する場（題材、めあて、発問、ペアやグループ、学級全体での話し合い等）を設定し、対話や学び合いを引き出す指導をすることができたか。」

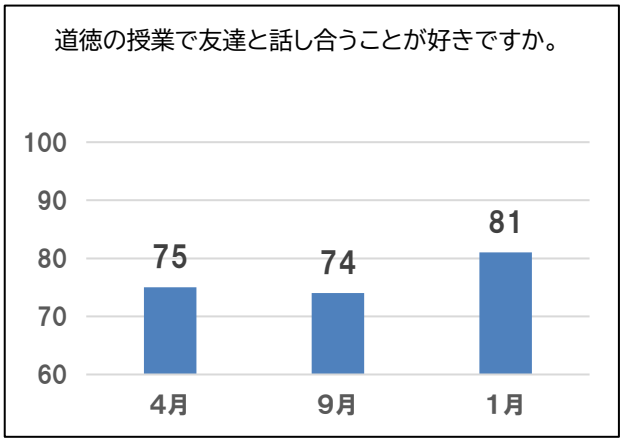
９月：９４％　　１月：９６％

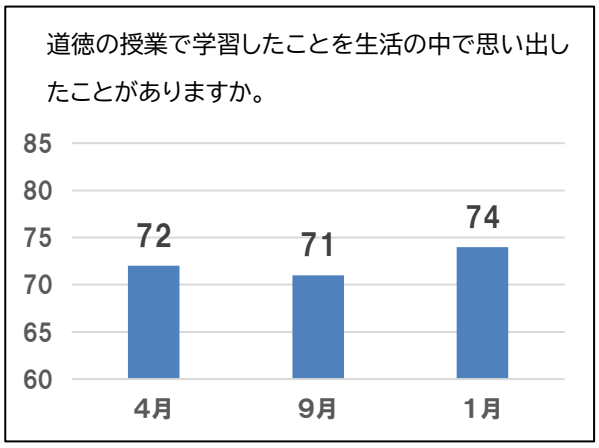
⑵　ねらいを明確にした道徳科の授業づくり

○　道徳科の授業における児童意識実態調査の結果









５　研究成果

⑴　組織的な研究体制づくり

授業力・学級経営力を高めることを柱とし、各部が連携して取組を進めたため、教職員が共通認識をもって取り組むことができた。その結果、学校行事や児童集では、堂々と自分の考えが言える児童や、自発的に話し手に体を向けて話を聴く児童の姿が見られた。また、たて割り班活動では、児童同士で本時の活動を振り返る場面が見られた。そのような児童の姿を見取り価値付けようとする教員も増えてきた。

研修の中では、全教師で研究への課題意識や悩みの共有を基にして推進事項を話し合うことで、自分事としての意識が高まり、教師自身が主体的に考え、実践する態度が身に付いていった。

⑵　聴き合い伝え合う（対話する）児童の育成

段階を追って指導を積み重ねたことが児童の対話についての意識を高めることにつながった。その結果、対話の際の学級の雰囲気が活気あるものに変容した。１１・１２月「基礎的環境整備」

を重点指導事項に挙げた背景は、学習に集中しにくい児童の参加を促すためであり、刺激の少ない教室環境が、落ち着いて学ぶ児童を育み、発言をして主体的に授業に参加できる児童をより増やすことができた。１・２月「聴き合う関係をつくる」は、改めて対話の原点に返ることをねらい、「よい話し手はよい聴き手である」を指導のテーマとし、発言者には手を止めて体を向けて「聴く」ことを全校で意識して取り組むことで、対話に参加できる児童が見る見る増えたことを教職員全員で実感することができた。

次年度においては、引き続き、全教員で対話を豊かに行う児童の姿を共有し、道徳科以外の授業においても、自分の考えを深めたり広げたりすることができるよう研究を深化させていく必要がある。

⑶　ねらいを明確にした道徳科の授業づくり

「道徳科授業計画アイデアシート」を活用することで、「明確なねらいの設定」「発問づくり」「授業展開」「教材の工夫」が整理され、教材研究が充実し、校内の道徳科授業の質の向上につながるとともに、見通しをもって授業に臨むことができた。

また、道徳教育推進教師と授業を振り返ることで、目指す児童の姿を共有したり、確認したりしながら研究を進めることができた。

一方、９月に実施した児童意識実態調査において、道徳科の授業についての肯定的な評価が全体的に下がっていることが分かった。本校の研究で「道徳的価値を深めさせよう」と教師が必死になることが、子どもたちを教師のねらいに乗せすぎようとすることにつながり、子どもが教師の求める答えを探すようになってしまったのではないかと考える。このため、９月以降は教師がねらいを明確にした上で、シンプルな発問と授業展開を意識するよう授業を見直すことで、１ 月の調査では、児童の意識を前向きに変化させることができた。

また、「あなたは、道徳の授業で友達と話し合うことが好きですか。」の項目に対し、９０％以上の児童が肯定的な回答をすることを目標としていたが、１月の調査では、８１％という結果であった。次年度は、道徳科の授業においては、教師も児童もより対話を楽しみ、自己の生き方についての考えを深めることができるよう、更なる授業改善に取り組む。